



未来へつなぐ

Vol.
166

文／本間 吾里砂

函館線脱線事故から一〇年、反省と教訓を次世代へ伝える「保線安全の日」
道内十一カ所をオンラインでつなぎ、再発防止に向けた研修会を開催

事故の反省と教訓を伝え 安全の重要性を再確認

全体で約六六〇名に上り、函館保線所会場には、約九〇名が集まりました。

二〇一三年九月一九日、函館線大沼駅構内で貨物列車の脱線事故が発生しました。それをきっかけに検査データの改ざんなど、鉄道の安全を根底から揺るがすような事態が相次いで発覚したJR北海道では、事故が起きた日を「保線安全の日」と定め、毎年、再発防止に向けた研修会を行っています。今年は一〇年の節目にあたることから、道内十二会場をオンラインでつなぎ、例年とは異なる形で実施。参加者は



開催のあいさつを行う綿貫泰之社長

研修会では、映像を見ながら事故を振り返った後、当時、同社の会長として会社再生にご尽力いただいた須田征男氏が講演を行うとともに、同じく、当時、工務部長として保線の安全体制の再構築に向けてご尽力いただいたJR東日本の伊勢副社長からも激励のメッセージをいただきました。ともに事故後の会社再生に

関わった経験から、一人ひとりが使命感を持って業務を遂行することの大切さを伝えていきます。JR北海道では、事故

後に入社した保線業務に携わる社員が全体の約六割を占めており、二人に登場いただいたのは事故を知らない社員に保線業務の重要性を再確認してもらうことが目的。

その後、各会場にて「二連の事象から一〇年が経過した今伝えたいこと」をテーマとした発表、保線の将来に関するグループ討論と会社役員との意見交換、保線系統における取り組みの紹介などが行われ、保線所長からの決意表明をもつ



トラックマスターでレールの歪みを測定

て研修会は幕を閉じました。

意識改革から始まった 安全確保への取り組み

事故後、JR北海道では、意識改革はもちろん、安全確保に努めながら、保線業務を進めています。データ処理の自動化、測定結果のリアルタイム表示などの機能が備わった「新型トラックマスター」や「保線設備管理システム」などを導入し、ヒューマンエラー防止および改ざん防止のためのセキュリティを強化。また、新機能を備えた軌道検測車「マヤ35形」を導入するとともに保線機械の自動化を図り、効率的な検査体制と労力の軽減につなげています。北海道新幹線についても、札幌延伸に向けた高速化や保守用車の開発など、将来を見据えた取り組みを展開しています。①